詩歌の窓

見立て

教材のねらい

「和歌の修辞」（二六六頁）では、和歌における見立てが解説されている。視覚的な印象の類似から、二つの事物を連想によって結びつける見立ては、和歌だけでなく、日本の文化にひろく浸透した技法である。日常の身近なところに見立ての例を見つけることもできる。

この教材では、江戸時代の見立て絵本『絵本見立仮譬尽』と、おからの別名を「うのはな」と呼ぶことを例として、見立ての表現のしかたと鑑賞のしかたについて理解を深めたい。

解説

見立てとは、あるもの（A）を別のもの（B）になぞらえることである。比喩とは異なる。比喩は〈AをBにたとえる〉ということであるが、見立ては〈目の前にあるAを目の前にないBと見なす〉〈目の前にあるAから、そこにはないBを連想する〉ということである。

見立てを用いて何かを表現する場合を考えてみよう。目の前にあるもの（A）を目の前にない何か（B）になぞらえたい場合、その何か（B）をどのように選べばよいのだろうか。

ポイントは、AとBは直接には何の関わりもないが、視覚的な印象（形状や色など）に共通点がある、という点にある。つまり、Aから、視覚的な印象を結び目として、そこにはないBが連想できる、そのようなBを選べばよい。

見立てが用いられた作品を鑑賞する場合は、表現する場合と逆の順序をたどれば、作中の見立てを読み解くことができる。つまり、目の前にある作品（A）の視覚的な印象から、どのようなもの（B）が連想できるかを考えればよい。

見立ての基本は、概ねこのようなものである。これをおさえたうえで、この教材で紹介されている①江戸時代の見立て絵本『絵本見立仮譬尽』の「た貝」と、②おからの別名である「卯の花」について考えてみたい。

①『絵本見立仮譬尽』の「た貝」

『絵本見立仮譬尽』は、見立ての技法で表現された架空の貝を集めた、貝尽くしの絵本である。書名の「仮譬尽」すなわち「かいづくし」には、「貝尽くし」の意が込められている。

『江戸見立本の研究』（汲古書院）の『絵本見立仮譬尽』の解題では、『絵本見立仮喩尽』が、先行する貝尽くしの絵本である『新撰三十六貝和歌』（元禄三年刊）などになぞらえた形式になっていることを指摘している。『新撰三十六貝和歌』については「参考」欄を参照されたい。

さて、『絵本見立仮譬尽』の「た貝」は、どのように読み解けばよいだろうか。

鑑賞者の目の前にあるのは、「た貝」に関する説明文、「た貝」を詠み込んだ和歌、そして「た貝」を描いた絵である。これらはすべて、「た貝」という架空の貝にまつわる情報である。これら

を丹念に読んだり見たりすれば、何を貝に見立てているかがわかるはずである。

「た貝」の場合、まずは説明文の「駿州田子の浦の名物」「正月二日の夜、此形を夢見る時は」から何が連想されるかを考えさせたい。駿河の田子の浦は歌枕であり、富士山が目前に見える名所である。正月二日の夜に見る夢といえば初夢であり、初夢に見ると縁起の良いものと言えば「一富士、二鷹、三茄子」である。このように、ことばからことばへと連想をつむいでいけば、共通項が「富士山」であることが見えてくる。富士山は日本でもっとも高い山である。つまり「た貝」という名前そのものが「高い」の洒落であった。

「た貝」は富士山であるということに気がついたところで、あらためて「た貝」を描いた絵に目を向けたい。「た貝」は、広がった裾の部分が黒く、その上が白く描かれている。これは、富士山の山頂に雪が白く積もっている様子を表しているのである。

富士山が「高い」ことから、富士山を貝に見立てた架空の貝を「た貝」と名付け、説明文と狂歌と絵で表現する。この「た貝」は、そのように作られている。

②おからの別名「うのはな」

「うのはな」は「卯の花」であり、ユキノシタ科の低木であるウツギの花のことである。初夏に咲く白い花は和歌に詠まれてきた。陰暦四月の異称である「卯月」は、その頃にウツギの花が盛りになることから「卯の花月」と称したことによる、という説もある（『日本大百科全書』「卯月」参照）。

「おから」は豆腐の絞りかすである。ウツギの花とは何の関係もない。しかし、白い色がウツギの花を思わせる。そこでこれをウツギの花とみなし、「うのはな」と呼んだ。ここでは、日常の（俗の領域にある）食べ物である「おから」が、歌ことばでもある雅な花に見立てられている。

見立ては、視覚的な印象の一致によって結びつけられる二つのもの（AとB）が、互いに無関係で、なるべくかけ離れているほうがおもしろい。

「おから」とウツギの花は、まさにそのような関係にある。「た貝」も、雄大な富士山と小さな貝という、無関係かつ対照的な二つのものが結びつけられている意外性におもしろさがある。

鑑賞

日本庭園の形式のひとつである「枯山水」も、見立ての例のひとつと言えよう。枯山水は、平らな庭に石や白砂を用い、水は使わずに、山水を表現したものである。枯山水の鑑賞者は、目前にある石と白砂の組み合わせを見て、形からの連想によって、山と水のある情景を想像する。

参考

この解説では、見立ての定義について、岩田秀行『江戸芸文攷』（若草書房、二〇九年）の「「見立て」追考」を参考にした。岩田はこの論文において次のように述べている。

「見立て」については、和歌における見立てを論じた鈴木

宏子の「視覚的印象を中心とする知覚上の類似に基づいて、実在する事物Ａを非実在の事物Ｂと見なす表現である」という定義が、非常に明晰で正確である。つまり、単に似ているというのではなく、ＡとＢは別々の事物であることと、眼前の実在から引き出される非実在の虚像という点が肝心なのである。和歌について論じたものであるが、俳諧に関しても、この定義はあてはまるものである。

ここで言及されている鈴木宏子による見立ての定義については、鈴木宏子「〈雪と花の見立て〉考」（『国語と国文学』一九七年九月）を参照されたい。

『新撰三十六貝和歌』は漁翁編、元禄三年刊の版本で、貝を詠んだ三十六首の和歌を左右一首ずつ組み合わせ、挿絵を添えた本である。国立国会図書館に『新撰三十六貝倭歌』の書名で所蔵されており、国立国会図書館デジタルライブラリーで画像を閲覧できる。

『絵本見立仮譬尽』は、影印・翻刻・注釈・解題が小林ふみ子他編著『江戸見立本の研究』（汲古書院、二〇〇六年）に収録されている。本書の編者である竹杖為軽は、洋学者の森島中良であり、幕府に仕えた蘭法医桂川家の四代目桂川甫周の弟である。中良は平賀源内の門人となり、浄瑠璃や、洒落本・黄表紙・読本などを著し、狂歌師としても活動した。戯号は竹杖為軽のほか、万象亭・森羅万象などがある。その事蹟と著作については石上敏『万象亭森島中良の文事』（翰林書房、一九九五年）に詳述されている。

（佐藤　至子）